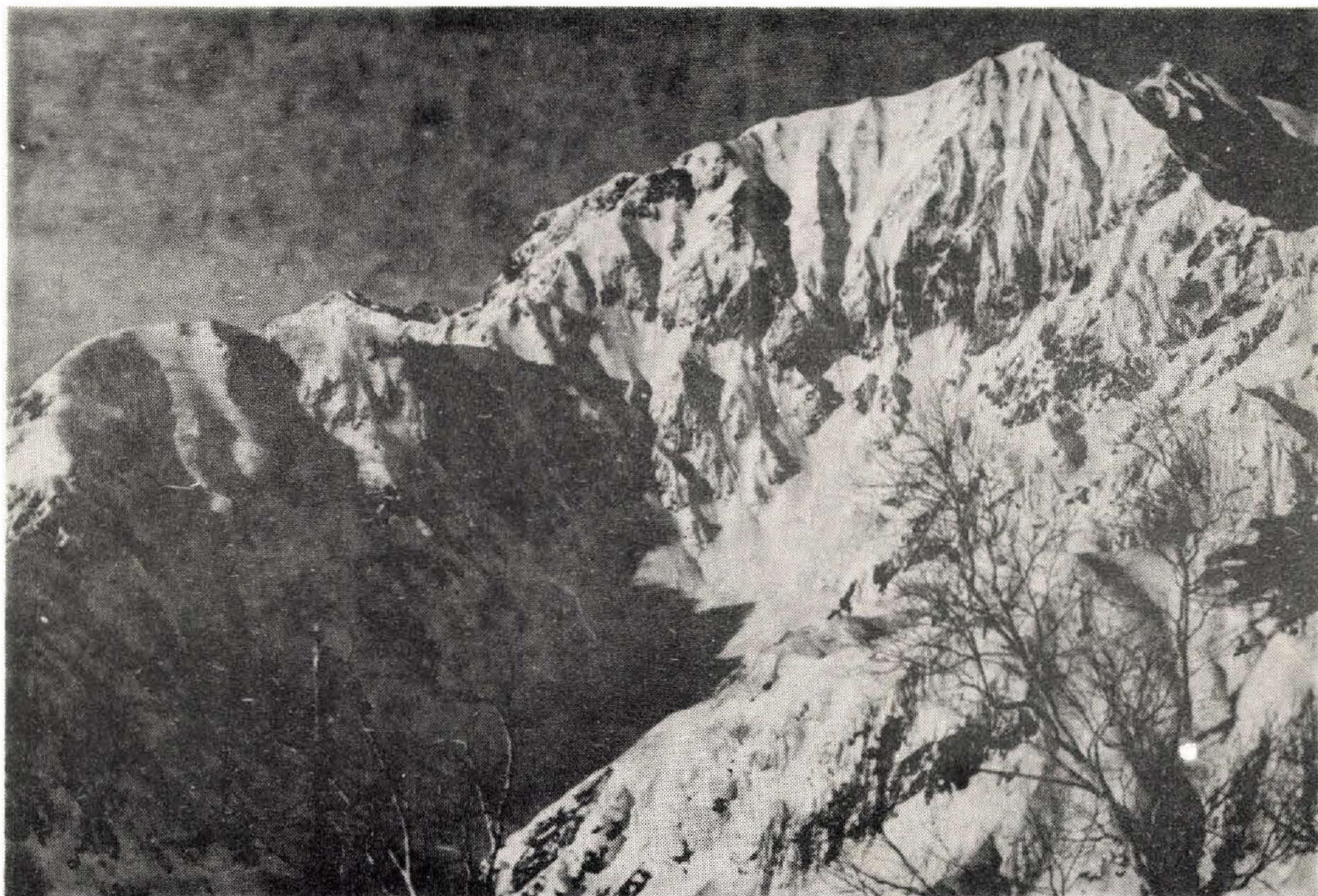


針葉樹會報

復刊第9號



1964年12月

187

188

189

190

191 192 193 194

195 196 197 198

199 200 201 202

203 204 205 206

207 208 209 210

211 212 213 214

215 216 217 218

219 220 221 222

篠原敏弘君

山本健一郎（昭32）

「会員篠原敏弘は、昭和三十九年八月六日深更南アフリカ連邦ヨハネスブルグにおいて交通事故のため逝去せられました。」

針葉樹の十二号にはこの時の模様を上原君が「劍からの縦走も終り槍で一行とわかれ、北穂南稜にテントを張つて、我々に、南稜を登つてきた人が話しかけてきました。一橋の方ですか。白馬で一橋の方に会いました。皆さんズボンのすそはボロボロでしたよ。これでケツパリスト工さんの率いるケツパリマソ達が、白馬迄の宿願を、身につけたボロにもかまわず、果したことが分り本当にほゝえましく思つた。可さん宅の話によると、とにかく汚なかつたようですね。」と書いてある。

そして秋には夜叉神峠から北岳へ登つたあと伊那から松本へきて春の穂高合宿の荷上げにも参加するなど二年の遅れをとり戻そうとするかのような山行が続いている。

篠原君がわれわれの仲間に入つてきたのは昭和三十年の四月だつたと記憶している。森脇先輩の紹介といふこともあつて當時三年に進級していた彼が新入部員として迎えられられての初山行は四月の二十三日から四日にかけての奥多摩の歓迎登山だつた。日原ヒュッテでのコンバは大変愉快で新人として歓迎を受けた城戸君達が遂に日原川の河原でおどり出し、小屋まで皆にかつぎあげられる者まで出る騒ぎだつた。

それからの篠原君は三年生で新人というハンデキヤップにもめげず実に良く山へ登り、部の生活にとけこんで立派な山男に

成長して行つた。翌月の谷川岳の合宿に森脇さん譲りの大振りの「山の内」をかかえてやつてきた頃から山の生活は彼にとつて生活のすべてになつたようだつた。続く夏の合宿でも良く頑張り、平の渡しから針ノ木。白馬へと元気に縦走に参加していく。

翌月の富士山合宿、十二月の鹿島槍、天狗屋根からカクネ里の合宿でも君は元気に登つている。あのラツセルに明け暮れた、天狗屋根の生活でも君は最後まで持前の陽気さをもつて頑張つていた。辛い毎日だつただけにカクネ里の登攀に成功して徹収してきた晩、胸は満ちたりた思いで一杯だつた。たのしいコンバそして鹿島部落の狩野さん宅での一夜は素晴らしいだった。小谷部先輩の筆跡を見最後の白いページに皆の名前を書きこんだ夜、山岳部の歴史を一杯の「白馬」で酔つて篠原に一生懸命に語り、良きアルピニストたらんと誓い合つた。

外へ出ると一面の雪野原に月がきびしく照つて泣きたくなるような夜だつた。

続く三十一年三月の明神東稜の合宿にも篠原君は中村（T）君と二人、合宿に先立つて唐松を登つたその足で上高地入りをしている。

この合宿では予期せぬ事故のため計画を中止するの止むなきに至つた。事態のしゆうしゆうのため深夜までかかつての01の引きおろし、重い荷をかついでの上高地への徹収作業の間チーフリーダーとしての私は心苦しく思いながらも他に人が居ず辛い仕事をすべて君にたのまざるを得なかつた。

上高地へ引あげの日すつかりバテてしまつた城戸君の荷を取りに暗い道をヘッドライトをたよりに疲れ切つた身体に鞭打つて一人戻つて行つた君のことを忘れることが出来ない。このような君は四年になつたときはすつかり下級生の信頼と尊敬をかちえてしまつていた。

四年になつてからも本当に良く君は山へ行つていた。そして下界でも良き仲間であつた。彼の憶い出と酒を切りはなすことは出来ない。酒も君の好物であり毎週月曜の部会のあと一杯はたのしみだつた。ラップを吹いて可さんの家の側を通る豆腐屋をつかまえて合宿用の大鍋に豆腐をしこたま買いこんでラヂユースに火をつけ、湯豆腐で一杯呑みながら時には夜のふけるまで語り明かした。良く家へ帰るのが面倒になり深夜の国立を郵便局へ行き夫々の家へ電話を掛けて部室に泊りこんだ。矢張りでも酒と言えば例の一件を憶い出さざるを得ない。三年生の

ときの秋のある夜国立で呑み、更に甘利さんにさそられて八王子まで梯子酒の上彼の家に泊りこんだその夜、小間物屋を開店した篠原君をねかしつけた小生は天幕を打つ雨の音としぶきに眼をさました。雨と思つたのは小便の音で彼は小生の頭越しに放尿におよんでいた。泡喰つてとび起き甘利さん吉田さんと寝ていた連中を呼びおこし篠原君を抱きとめたがもうとまらない。あれほど他人の小便が長く感じられたことはなかつた。くさい部屋で一夜をすごした一同は翌朝逃げるよう甘利宅を退散したのだつた。梅雨になるとその部屋は嗅つたと甘利さんは言つていたが今でも嗅うのだろうか。

そんな生活を山行の間に続けているうちにいつしか卒業しちゃの職場での生活に入つたあとも篠原君とは良く会つた。彼の家が藤沢にあり私の勤めが横浜であつたため良く帰りに落合つて横浜の街を呑み歩いた。そして山の打合せをしては良く出掛けた。

卒業の翌々年の夏二人で屏風岩のエルンゼへ出掛けたことがあつた。上高地の雜踏にびつくりし、天幕を張つた徳沢では夜おそくまでさわがしくすつかり君は不気嫌だつた。しかし翌朝朝露を踏んで横尾への道を辿る頃には気嫌も良くなり、取付点でザイルを結び合う頃には浮き浮きした気持になつていた。ザイルを結んでみればピタリと呼吸があつて気持ちの良いクライムがたのしめた。矢張り学生時代の山仲間は良いな、掛替えがないんだなどの感を深めたのがこの時である。途中で夕立に合つて雨宿りをしたため大分おそくなつたが、十八ピッチの登

攀を終え午後五時頃には稜線へ出て屏風の頭をこえ涸沢から横尾を経て十九時間目に天幕へ帰りついた。二人だけの山といえばあともさきにもこのときだけだったのでよけい印象に残つてゐるのかも知れない。

このごろの私と山について

その後も日本山岳会の講習会の講師として西穂や木曾駒へ一緒に行つたが、高校生を相手の木曾駒のとき最後に一言宛と求められて講師が順に勝手なことをしやべつたのだが、彼は山登りとは読み、書き、登ることの総合であるといふ持論を披露して熱弁をふるつていたが、その割りに彼自身書く方はマメとは言い難いのでおかしさをこらえて聞いていたのを覚えている。

惜しむらくは彼自身議論し、呑み、かつ登る方のタイプで、あまり書きのこしてくれていないので誠に残念である。もつと、

このごろの私は奥秩父の山きり歩いてゐないのであるが、いろいろと考え方させられることが多い。そしてそれは太平洋戦争の前と后との比較から生れてくるようだ。

さぞ淋しいことだろうと思うと可哀そりで泣けてきてしまう。皆で山へ行けばどこからか彼がポロボロのキスリングを背負つて、卒業してから買つたご自慢のシモンをさげてニコニコと白い歯を見せてあらわれるような気がする。

もうこんな悲しい原稿は書きたくない。皆身体を大事にして長生きして呉れたまえ。そして篠原君の分までも山へ行き、そしてあいつを憶い出そう。

太平洋戦争を境として日本の登山の姿は大きく変化した、と思う。深山溪谷に自動車道ができ、ダムが造られ、原生林が失われた。日本の経済の発展はいろいろの角度から日本の自然の奥院まで呑食してきてゐる。しかしこんな変化よりももつと大きい変化は、登山界そのものの変化であろう。すでに戦前において日本山岳の処女地を拓きつくした日本山岳会を中心とする正統派は、戦後は目を海外に向け、経済発展の荒浪にさらされ始めた日本の山々に余り関心を持たなくなつてきた。視野が角度を変えた。正統派は海外の山岳に初登攀の夢を画き、あるいは

柿原謙一（昭12）

は冬山の至難なルートの登高記録に自らを限つてきた。

正統派が戦前に登りつくしたあの山々を踏んだのは大衆である。経済発展・労働三法・労働階級の生活向上——という一連のうごきから、大衆の自然愛好の心は山岳に向つてゆく。

正統派が戦前に歩きつくし、書きつくした山々の美は、戦后いささか変容を示してゐるとは申せ、戦前の姿を知らぬ戦后の大衆によつてその共有財としてうけつがれ愛されるに至つた。戦前には限られた僅かの人々にしか解放されてゐなかつた山が、戦後このように広く人々に登られることになつたこと自体は、まことに喜ぶべき事態であろう。

登山界のこの大きな変化は、起るべきことが起つたものとして冷静に反省すれば良い。憂るべきは変化に対処すべき心のそなえがなかつたことであらう。

第一に、正統派が処女地開拓に心をむける自然のなりゆきは理解できる。そうなるのが当然であらう。俗に女房と畠は新しいのが良いとある。だが古い山への配慮はどうしたか、である。そこには後続の大衆があるのだ。

第二に、大衆は頑健なる胃の腑をもつて自然を征服する。だが悪い面がある。山頂もお花畠も荒れ、指導標が破壊される。

静かなる原生林にトランジスター・ラジオが浪曲をかなでてゐる。嘉門次の峻厳なる答もなかつた。しつけのない山頂の舞踏は、忘年会あとの料亭をほうふつせしめる。

第三に、このありさまを見せつけられた正統派は、軽視の念

をもつて遠ざかり、いよいよ目を海外にむけ、または冬山の奥地に逃避してゆく。

山と人との間が、どうしてこんなことになつてきたのか。山とは勿論わが愛すべき日本の山々である。わが祖国のあの美しい山のことである。

戦前から日本の登山界をリードしてきた正統派の人々は、ここに反省すべきいろいろの問題をもつてゐると思ふ。

祖国の美しい山々が心のもちかたや登山のしつけの欠如によつて荒れてゆくことは、よいことである筈がない。その心・しつけは、誰が後輩に伝えるべきであつたか。

戦争という断層、大衆登山の大浪を前にしては、そんなことは机上の空論である、と云うことができる。しかし、たとえば、日本山岳会を中心として大学山岳部やO・Bの会などの代表と労働運動の首腦者とまづ話しあつて、山に登る心をきれいにする運動といつたものでも発足させてみるとする。山岳雑誌のありかたにも思をひそめてみるとする。そうしたとき、登山のしつけ、ありかたを強調し伝えるのは、誰の役目であらうか。登山技術だけ伝つて、心のしつけが失はれる理由はあるまい。音頭とりが音頭をとつてゐない。

衆人皆醉り、吾独り醒たり——は屈原漁父の辞。莞爾として海外の山々を望むも、日本の山はどうなるか。

会報編集子より求められた「このごろの私と山について」の題目は、こうした所感とならざるをえない。(昭39・10)

森川真三郎君の手紙

望月達夫（昭13）

僕と同時代の山岳部の仲間のなかには、戦争や病氣のために亡くなつた者が少なくないし、また先輩にも数名はいる。時々そういう人たちの追悼会とか、追悼文を集めるとかしたいと話しながら、いつも実現できぬままに二十年近い歳月が流れた。怠慢を責められても致し方ない。

小谷部のことは曾て「山岳」第44年第2号に書いたことがあるが（その後右は「現代登山全集」第一巻日本の山と人にも収載された）、僕より一級下の森川のことは誰も書いていないので、偶々彼の古い手紙が見つかつたのを機会に、少し書いておきたい。

まず、その手紙から紹介しよう。

拝啓 御無沙汰致しました。其の後相変らず元氣の由大慶に存じます。昨夜帰京しお手紙拝見しました。合宿へ行けなかつたそで残念でしよう。小生も無事及第し愈々諸兄の仲間入りです。それから早速東京湾汽船で、大島から下田へ出て谷津、峯、湯ヶ野、湯ヶ島、修善寺、古奈、熱海、湯ヶ原と八日程かかり、伊豆半島を縦走？して来ました。其の間天城と十国峠の景観は全く素晴らしいものでした。「いで湯の旅」も亦棄てたものもありませぬ。昨日は赤石、塩見辺りがよく見えました。富士も真白でした。海の方も三浦半島から房総半島、大島が一望に見られました。

山の幸と海の幸を二つながら合せた様なものです。頂上でビールを飲んで一層愉快になりました。天城の北側は、まだスキーが出来る位の雪が多く積つて居ました。グリセードは駄目でした。

足の方も至極好調で、四、五里歩いてももう平氣になります。新学年からは秩父の山へでも、新入生を連れて足ならしに出かけたいと思つて居ます。スキーも今冬まで自重して、それから猛烈にやりたいと思つて居ります。兎に角ハイキングからやり直します。

合宿の方も第一次の方は相当練習が出来たとの事ですが、唯第二次の方が種々故障を生じ、剩へ佐々木が負傷したとの事、驚きのほかありません。明日早速赤十字病院へ見参に行く積りです。

新学年からは總てを一新した気になつて、大いに努力したい

と思つて居ります。今度こそ同じ失敗を二度繰返さぬ様にと思つて居ます。

それから昨秋の南の事件について、小生も是非何か書きたいと思つて居りますから、近い中に柿原兄の遭難報告（既に見せてもらひましたが、詳細な経過が出て居ます）と共に発表する積りです。

今はもう山の本を読むには耐へられぬ程です・山へ行きたい山へ行きたい。そればかりです。

昨日だつて例のいでたち（ポロ洋服と長ズボン、登山靴、大形キスリング等一式）で、十国峠の上に立つて、南や富士を見た時は、そのままどんどん山の方へ歩いて行きたくて耐りませんでした。

では何れ又お目にかかります。お大事に。

三月二十七日

望 月 兄

森川 生

拝 具

見出しへ「危い岩登り、商大生重傷」とあり、森川の写真が出てゐる。「甲府電話」東京商大一ツ橋山岳部員林俊介君の一行は去る三十日南アルプス北嶽に登山すべく垂崎町から登山したが翌三十一日朝一行中の森川真三郎、柳原謙一両君（筆者注：柿原の誤り）は地蔵嶽地蔵仏の登攀を決行したが、寒気のため身体の自由を失ひ筋斗打つて転落し幸ひ身体につけたロープが付近の岩に絡まつて途中で止まつたため慘死を免れたが右足を岩石に打つけ骨折したのを始め全身数ヶ所に重傷を負つたので案内人が北御室小屋に引下し一日垂崎町白鳳会に急報応援を得て手当中だが相当重態◇遭難した森川君は京橋区西八丁堀一ノ七乾物屋森川和平氏三男で府立一中卒業現在商大予科三年に在学中で同山岳部委員、常にリーダー格で活躍してゐた昨年夏は一人で二週間も秩父の山奥で暮してゐたといふ程で、今度のスケデュールは二十九日出発三日に帰京の予定で出掛けたものである。

この手紙は昭和十一年三月のものだが、彼はその前年の秋十月、地蔵仏へ柿原君と二人で登り、頂きの直下でスリップして墜落し、大怪我をした。その時のことは「針葉樹」第九号記録欄五と七頁に詳しく出てゐる。また僕の古いスクラップブックには、昭和十年十一月二日の東京朝日新聞に載つた記事があるので、御参考までに披露しよう。

この遭難のあと彼は永いこと慶應病院に入院していたが、幸い翌春は退院となつて、春休みに伊豆の方へ旅をこころみたのであつたろう。その時の模様がこの手紙によく現われている。森川は山岳部生活の後半、つまりこの遭難のあと、小谷部と組んで困難な登攀の幾つかをなしとげ、登山史上にも名を残した男だし、小谷部の他には船本や大塚、日江井などとも組んで登つた。僕と綱を結んだのは、夏の北尾根三峰のフェースや滝

谷第四屋根ぐらいで、共に小谷部と三人だつた。だから森川の憶い出をかくとしたら、僕などより本当は小谷部が一番いいのだが、その小谷部も既に亡いのだから、もうそういう望みはなくなつた。

変な沢の御紹介

森川は昭和十三年三月に船本と前穂高の東壁を登つてひどい凍傷に冒され、右足指全部を切断せざるを得なくなつて、気の毒なことをした。しかも学窓を出てから小谷部と同じように胸をわざらい、戦争中は房州で療養生活をおくつていたようだ。

昭和二十年十二月、戦争も終り彼の身体もかなりよくなつたので、富士見に療養中の小谷部を見舞に出かけた。終戦直後で汽車は非常に混んだということである。小谷部は思いがけぬ岳友の訪問に驚喜し、曾ての僚友は手をとり合つて積る話に時のたつのも忘れたであろう。

しかし、寒い季節のことと、森川は旅の疲れが出たのか富士見で風邪をひき、それがもとで遂に十二月十三日急逝した。それを聞いた小谷部は余りの落胆から森川のあとを追うように瞑目したという。二十二年の暮、七年振りに戦地から帰還した僕は、この話を人伝て聞いて慟哭せずにいられなかつた。

生前一本の綱を結び合つて、北岳パツトレスや荒沢奥壁などの困難なルートを切り開いた二人が、くすしくも同じ病で、同じ場所に、しかも日を同じうして長逝したことは、まことに不思議な運命といふほかはない。

(一九六四年九月)

事情があつて、

途中から引きかえした山行を幾度か経験しまし

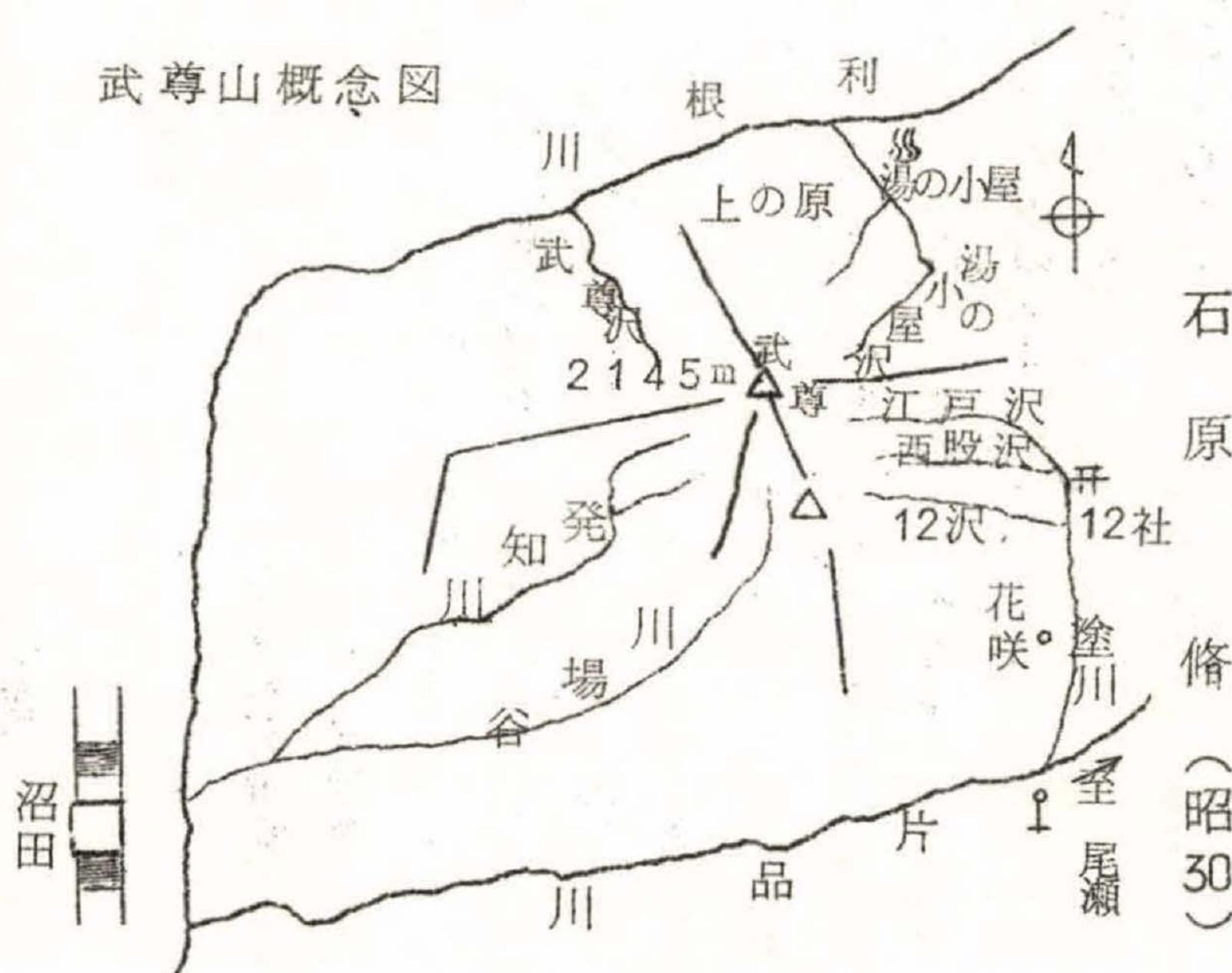
たが、今だに心残りなのはこれから御紹介する

武尊山十二沢た

だ一つです。妙な沢で、文献もありませんでした。

そこで、地元

武尊山概念図



石原脩 (昭30)

の山岳会（沼田・片品）に問い合わせたところ、「文献無し、内容不明。」との返信に勇躍して出発したわけです。

(前日)十一月下旬の連休を利用。パーティーは三名。三泊四日の予定で土曜の午後遅く上野発・沼田下車、尾瀬方面行き

のバスに乗車。一時間半を要して、武尊登山口なるバス停に着く。

暗夜を歩き出す。本流片品川を渡り、塗川の左岸沿いに二十分、村道左手の空地に天幕を張る。

(第一日)

一時間余にして、塗川最奥の部落花咲に着く、ここ迄は一日に二~三本のバス運行あり。バス停前の雜貨屋は人も泊める由。

材木運搬用の広い道を更に一時間半にて、十二沢出合に達す。八米の滑滝を見せて水量多し。出合の左岸に十二社と称する祠があり、御神体は三寸弱の夫婦神で、男は斧を、女は子供を抱いている。右隣りに三畳敷き程の小屋が附属しており、仮眠所に出来る。

遡行開始。左岸を大きく高捲していくと、視界は一時に拡がり、高原状となり、踏み固められた細道が現れて谷の奥の方向を目指す。二十分強にて再び平凡な高原の小川と化した十二沢を渡り、右に折れて右岸沿いの踏み跡を辿る。四十分程で、右に大きく切れ込んだ十二沢本流を見出し、踏み跡も失われたので沢に降り立つ。この間は、高原状の中に数多くの細流があり迷わされるので磁石により方向感覚を失わぬ様にした。

次の時間半は、退屈な岩石帯を辿る。苔多く、両岸の原生林は濃く、ケルンや鉈目の人跡は既に全く無く、岩は不安定である。

七米程の魚留滝（仮称）は右岸を確実なホールドにより登る。次いで滑滝帶が数百米続く。水量が少き為、景観は左程でない。

が、小さな釜の続く箇所もあり、中の一つに人みしりしない三寸ばかりの岩魚がいて、我々一行を見て近づき、水際三〇センチの近さで、水に顔を寄せた我等三人と暫くニラメツコ。その口の巨大さに一驚。その間四十分程の素晴しき区間であつた。続く四十分は再び岩石帯となる。中洲状の高台に天幕場を作れる。

(第二日) 雨の為停滞。

午后。小降りの中を、上部偵察に出発。約五十分の岩石帯歩きの末、胎内の滝とも称すべき岩石をくり抜いたような五メートルの滝にあたる。急に両岸はせばまり、周囲が土の壁と化す（ハンマーでたたくと結構固い、しかし脆い。熔岩の一種と思う。）F2はその土壁をえぐつて七メートルほどの落差で現れるが、両岸共に滑らかで手のつけようがなく、釜は深い、まるで赤土を竹べらで細工したような滝であり、滝上はナイフを一文字に入れただような空間が見えた。やゝ戻り、左岸を大きく高捲くと支沢に出る。支沢は本流に五メートルの滝で合流しており、その下降は悪い。本流はすぐ五メートルのF3、十メートルのF4と続く、F4は黒い固い岩を扇状に拡がりながら落ちて美しい。再び沢はせまり、両岸が赤土になると、再び竹べらでえぐつた様な土滝と釜に行く手を閉された。⋮⋮⋮

記録の御紹介は以上で終らせていただきます。その後は、翌日往路を下山しましたので、想像もつきません。機会があれば、前夜十二社に仮眠し、軽装で前武尊まで抜けてみたいと思つております。

最後に、武尊山について調べた事を附記致します。誠に古い火山であります。南を片品川に、北・西面を利根川に依つて洗われ、頂上の峻剣な尾根筋のイメージが加わつて、厳しい山であるかの様に一般に思われておりますが、出来上つた時は美しい裾野に囲まれた山であつたようです。今でも北の上の原、南西の王原から下手の方、また、今回の山行で辿つた南面・西面もゆるやかな高原に包まれ、その裾を谷がえぐつて居り、河岸段丘とは創成を異にする事が歴然としております。したがつて今回の山行記録にある如く、勇躍沢登りを始めた次の瞬間に、抜渉に一時間余を要する高原に飛び出したりするのであります。

沢登りで記録が多いのは、南面の川場谷のみで、東・西・北面の記録は皆無に近く、沢登りの興味は北面の湯の小屋上流にあります。重装備での長距離沢歩きとなります。西面は、高原の小川歩きになる公算が大です。

されば西面の三本の沢は、大きな期待はかけられなくとも、タクシーを利用して高原の奥底迄入ることにより、今后の隠れたる武尊山の沢歩きとして、やがてクローズアップされるようになります。

先日の評議員会に決められた遠征委員会が去る十二日開かれ、次の様な事柄が話合われた。

まず最初に、今後の方針を如何にするか、という点について種々討論されたが、結局の所、母校創立九〇周年の記念事業として遠征隊を出すという具体的な目標を置き、それを前提にいろいろ調査や研究を進めよう、ということに落着いた。

九〇周年は来年（一九六五年）なので、その記念事業にとりあげる様、学校側に申請するのは早急になされねばならないが、これについては関委員に一任された。記念事業として採用され

第一回遠征委員会報告

十月十二日 於・如水会館

出席

吉沢

一郎

（昭

3

望

月

達

夫

（昭

13

関

恒

義

（昭

23

倉

知

島

寛

（昭

26

蛭

川

隆

夫

（昭

38

佐

藤

之

敏

（学

生）

得るかという点については、アンデスの時の実績から言つて殆ど問題はないようである。

遠征の時期を選ぶに当つては、その準備期間、外貨ワク獲得の問題などを考慮の上、次の様にした。すなわち、体協のスポーツ外貨を使用するには、前年の十月までに計画書をそえて申し込まねばならないが、これを、「今から約一年の間に確固とした計画を打ち出し、来年十月に計画書を提出、再来年（一九六六年）四月から一九六七年の三月までの間に実現する」というワクにはめ込むことにした。

さて、一番懸案の問題はどこに行くか、という問題であるが、これは現在の情勢を充分考慮した結果、カラコルム（パキスタン）にしぼつて考えてみることになつた。パキスタンとて、決して見通しは明るくないが、申請手続などは次の問題にして、一応その中から対象とする地域を定め、調査の上詳細なる計画を作成することにした。十一月中に予定されている次の委員会では、具体的な計画作成について、いろいろ検討するつもりである。

（倉知）

針葉樹会翁爺会

オージー

この節の針葉樹会の会合は、若手の会員もふえたせいで、たまたまに年寄りが出席しても顔見知りが少なく、ついつい顔を出していくくなるという声がある。では、ひとつ古い会員だけで集まるという話が松木さんからあつて、左記のような集いが行われた、昭和十六年以前卒業の会員で、在京（近県を含む）の方たち三十四名に案内状を出した。昔の針葉樹会の雰囲気が出て、閉館まで懐旧談に花が咲いた。これからも時々こういう会を開きたい。（会名はマゴさんの発案）

出席者	日 時	場 所
岩 望 吉 清 吉 渡 中 如 水 会 館	昭和39年9月4日午后六時から	
崎 月 沢 水 沢 辺 川 孫 一、		
利 達 一、 松 達 九、 佐 森 村 五 十 歳		
一、 夫、 次 雄、 原 尾 一、		
日 江 井 正 誠 二、 佐 木 原 謙 三、		
（以上十四名） 己、 謙 金 二、 馬、		

（世話人松木・望月）
(TM記)

月見の宴・懇親山行の報告

十一月十四・十五日 於国立部室他

出席 久保孝一郎、横瀬奥野巖根、須山皖
岡中田宏根、甘利山修平
橋村幸治、渡辺崎仁朗
島成、柴嘉新朗
高橋寛、多田伸
橋信成、渡辺嘉治
橋成、倉新治
橋伸、岡佑敬

月見の宴と懇親山行と一緒にやるという企ては、今回の成果から見るとやはり失敗だつたように思います。何しろ、前者は山岳部の行事で後者は針葉樹会の行事なのだから、これはどうかい無理なのかも知れません。

例によつて月見の宴は、Bの昔話に花が咲き、学生サンはそばでぼんやり聞いていたといつた具合でした。昔の話が前向

きのものならいざしらず、昔はよかつた式の話ならば、学生サンにとつて誠につまらぬものでしよう。昔の部の雰囲気が、現在に生かされる様な形で語り伝えられる様に、この宴の進行がなされたいものです。

それに、酒を呑んでたわいない話や歌で気をまぎらわし騒ぐ、という形も、もはや現在の情勢には合わないのでないだろう

か。現在の学生の生活意識はあまりそういうものを必要としていない様だし、OBの中にでも今は、国立くんなりまで出掛けついでドラ声を張り上げることなどには、疑問を感じられる方も少なくないでしよう。

今回は、多少季節が遅いせいもあつて、何となく寒々しい感じを受けたのは、単に筆者だけではありますまい。當時、学生とOBの間に密接な関係あつての上で月見の宴と、ほとんど交際のない両者の間での年一回のそれは、おのずからそのやり方や意義に差があるべきであります。

一方、翌日の山行の方は、折りから行楽シーズンであることや、七五三などと重なつて、多くの良きパパ達の不参加を誘い、参加が少なかつたのは残念でした。

それでも天候だけは輝くばかりの快晴にめぐまれて、部室に一夜を明かした十名は武藏五日市に向いました。そして、盆堀川を戸倉三山のふところへ入り、若手学生組はオリソコナイ沢を遡行、晚秋の山の静けさを楽しみました。折りから奥多摩の低山は全山紅葉が美しく、澄みきつた碧空に色もあざやかに映えていました。

思うに、この懇親山行にしろ、月見の宴にしろ考えていた程参加者が多くないというのは、連絡が不徹底ということもあるけれど、何しろそれ自身にあまり面白さ、目新しさ、興味を引くものがない、ということが決定的な原因ではないかと思います。単に昔の思い出にふけるという老人趣味は、たとえOBになつてもわびしいことで、やはり何らかそれ自身何か意味ある

ことをやりたい、という気持、昔の仲間と一緒にならどこへ行こうとかまわぬというのでなく、多少、金と手間をかけてもまともなことをしたいという気持は、誰しもお持ちなのではないでしょうか。

針葉樹会の行事も、もつと楽しみのある、もつとにぎやかな、もつと刺激のある、そしてもつとスマートなものにしたいものです。次は来年二月に懇親スキーの予定がありますが、今度こそ盛大に行うべく、幹事一同張り切つて居ます。もし、こうしたら良い、とか、いい所を知つて、という様な御意見があれば、ましたら、ぜひ幹事までお知らせ願います。（K）

一月見の宴招待状通信欄より――

会報幹事 殿

前略

倉知様の御命令により月見の宴の返事の葉書通信欄のぬき書及び住所変更のチエックを致しました。
今度の会報にのせる様にとの倉知様の御意向ですのでよろしくお願ひします。

只今冰雪訓練合宿とゼミのレポーターで少々忙しいものでまちがいがあるかもせんが、なにとぞこのぐらいで御カンベン下さい。

十一月十六日

原 博貞（現役）

一年余り入院生活をして此の十月中旬から出社していますが、未だ病院と会社と一日置きに通つてゐる状態です。

大塚君が札幌に来たので今年の冬は小林さんと三人でニセコへでも行くのを楽しみにしています。

堀 岡 清（昭10）

この秋の奥秩父を訪ねて拙句まで

山旅の秋は深まる原始林
秋深し水源地なる原生林

柿 原 謙 一（昭12）

過日 日銀札幌支店長大塚武氏道内視察にて来夕、立寄られて折柄新雪に映える夕張岳と共に遠望し語り合いました。

林 正 敏（昭17）

小生去る八、九月米国出張しましたが、ロスアンゼルスの石井左右平先輩とお会いし半日ゴルフ、夜は飲みながら山の唄などうたいました。至極お元気の御様子でした。

佐 薙 恭（昭31）

先月社用で西パキスタンのカラチへ行つて來ました。時間がなくて山は望めませんでしたが、来月早々再び出かけますので今度はナンガバルバットぐらい見てこようと思つています。

・ 中 村 保（昭33）

二年間の予定でニューヨークに出かけました処ビザの延長が駄目だと言うので丁度一年目に日本に帰られました。

その代り帰りはのんびりとカナディアンロッキーズを散策する

機会にもぐまれ比較的幸福でありました。

市川陽一（昭34）

十月三十日五年振りに部屋に寄りました。タキ火があつて思ひ出が一層強く浮びましたが、サツマイモのニオイが全然なかつたのは淋しい限りでした。

峰高教通（昭35）

昭4 赤城鈴太郎 本年四月市役所をやめ休養中
昭16 佐野茂雄 自宅電話番号（三二一）五五七二
昭17 山田亮三 港区芝虎ノ門十五虎ノ門ビル

新潟地震の十八時間前に赴任した。巻機山、守門山等を訪ねた。

山元淑弘（昭35）

昭23 伊藤恙生 Pacific Co., Ltd
昭22 岩谷英生 260 West Broadway, New York
13, N.Y. U.S.A.

十一月二十二・二十三日かけて雷鳥沢に新雪を滑りに行こうと思つております。ひよつとすると先輩、現役の誰かが来ているのではないかと思つています。

竹中彰（昭39）

昭22 三井金属大阪支店へ転勤
(四四一) 三七三一
豊中市末広町三ノ二ノ一二

十月二十四・二十五日の両日鈴鹿雨乞岳へ行つてきました。どうやら再び歩けそうです。

中橋寿雄（昭39）

昭23 大島理則 兼松彌名古屋支店転勤
大阪市東区南久宝寺町四ノ三九

追記 市川先輩より

加地幸雄氏は九月からワイスコンシン州のミルウォーキー大学の哲学のインストラクターとなりました。

昭28 荒上田駿策 自宅 豊中市末広町三ノ二ノ一二
昭26 荒砥通虎 勤務先 台糖ファイザー大阪営業所
昭25 望月敏治 神戸銀行船場ビル
(一五一) 七八二一七
西宮市下大市西町一〇一
三菱自動車販売企画課
(五七二) ○二五一

住所変更・勤務先変更

昭30	須山修平	千代田区神田旭日町一一金杉ビル(二五二)七二九一
昭32	山本健一郎	自宅
昭33	柴崎新	勤務先 横浜市港北区つつじが丘
昭32	各務謙蔵	勤務先 西多摩郡福生町志茂一一五
昭32	勤務先	パブリカ多摩K・K
昭33	上原利夫	(五一)二八一一七五
昭33	塩川清彦	千代田区丸ノ内一の六の一
昭33	宇田川徳治	東京海上火災船舶部地方課
昭35	丸子博之	大阪市堺市津久野町一ノ一〇
昭34	塩川清彦	電話 堀(七)七四二四
昭35	自宅	世田谷区経堂町六四三
昭36	有賀盈	小平市津田町一五〇三
昭36	勤務先	浦和市本太町三の二五二
昭36	勤務先	電話浦和(二二)八六四一
昭36	勤務先	木三二五五
小林正直	勤務先	丸紅飯田志木寮
住 所	勤務先	昭和鉱業K・K
新宿区弁天町一四七	(八一)四一一六	

針葉樹会報	復刊第九号
発行日	昭和三九年十二月一日
発行者	中央区京橋一の一
連絡先及び 原稿送付先	日本合成ゴム(株)人事課 大建二郎宛
発行会	

